
ハヤテ&ハーマイオニー

桂 ヒナギク

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハヤテ&ハーマイオニー

【Nコード】

N8527D

【作者名】

桂 ヒナギク

【あらすじ】

下田温泉の効能により、ヒナギクが浸かった湯船に入ったハヤテが女性化して更に……。不定期更新です

第01話：分離（前書き）

何か、ハヤテの女装とか女性化とか、結構人気あるみたいなので、
こんなのをやってみました。連載です。のんびりですがお楽しみ下さい。

第01話：分離

練馬区にある三千院家の屋敷。

綾崎^{あやさき} 颯はそこで執事をやっている。

そのハヤテが、仕事を終え、夜道を散歩していると、クラスメイ
トの桂^{かつい} 雛菊と偶然逢った。

「あら、ハヤテくんじゃない。こんな時間にお散歩？」

「ええ、まあ。ヒナギクさんこそ、こんな時間に何してるんです？」

「塾から帰る所よ」

「そうですか。最近、何かと物騒ですから気を付けて下さいね」

ハヤテがそう言っで見送ろうとすると、ヒナギクが細い目で見詰
めた。

「あなた、それでも男？ 普通、此処は家まで送りましようかとか
言うものよ」

「否、ヒナギクさんなら大丈夫ですよ。だってヒナギクさん、結構
強いですし」

ハヤテがそう言つと、ヒナギクが絶界を張つて目を赤く光らせて
睨み付けた。

「どう言つ意味？」

「え？」

「それどう言つ意味！？」

（ヤバッ！ 何か知らないけど地雷踏んだ！？）

ハヤテは慌てて言葉を考え・・・。

「えっとですね。それはその、つまりですね……」
浮かばなかった。

「つまり、私が男っぽいつて言いたい訳！？」

「ちっ、違いますよ！ ヒナギクさんは女の子です！ か弱い女の
子です！ ホント、側に居ないと心配で心配で！」

ハヤテが必死にそう言つと、ヒナギクは怒りを鎮め頬を赤らめた。

「そ、そんなに心配しなくても、大丈夫なんだから……」

（ふう。何とか危機は脱したぞ）

「でもまあ、有り難う。所でハヤテくん、暇なんでしょ？」

「ええ、まあ」

「だったら、ウチでお茶しない？ 今日、仕事で両親居なくてね」

「はあ」

ハヤテは細い目で見た。

「何よその顔？」

と微妙に膨れるヒナギク。

「何でもありません」

「あ、そ。で、ウチ来る？」

「はい、行きます」

（つて答えないと怒るだろうなあ）

ハヤテはそう思い、ヒナギクと共に桂家に向かった。

桂家に着いたハヤテは、ヒナギクの部屋のベッドに座っていた。

ヒナギクはバスタオルと着替えの服を持ってドアを開ける。

「お風呂ですか？」

ハヤテがそう訊ねると、ヒナギクは振り返った。

「一緒に入りたい？」

「良いんですか、入っても？」

「駄目に決まってるじゃないのよ！」

ヒナギクはそう言うのと廊下に出て思いっ切りドアを閉めた。

部屋に残されたハヤテは、ヒナギクとの混浴を妄想した。

二人全裸でシャワーを浴び、頭を洗い、背中を流しっこして湯船に浸かる。

そんな図を頭に浮かべていると、風呂上がりのヒナギクが現れた。

「ハヤテくん」

ハヤテ、妄想中により無視。

「ハヤテくん？」

ヒナギクはハヤテの眼前で手を振るった。

「えっ？ あ、ヒナギクさん」

「ハヤテくん、大丈夫？」

「だ、大丈夫ですよ。それより、僕も入って良いですか？」

「別に構わないわよ」

「では借りますね」

ハヤテはそう言うと、脱衣所に向かい、裸になって浴室に入り、シャワーを浴び、頭と体を洗って湯船に浸かった。

すると、ハヤテの体に異変が起きた。

髪が背中まで伸び、胸が少し膨らみ、一物が消えると言う不可思議現象。

ハヤテは徐に湯船を出ると、自分の体を改め、ドアを開けて叫んだ。

「ヒナギクさーん！」

「五月蠅いわね。何よ？」

とヒナギクが文句を言いながら姿を現した。

「ちよっ、何よその格好！？」

ヒナギクは驚き、後ろを向いて顔を隠した。

「そんなのぶら下げてないで早く仕舞いなさいよ！」

「あの、よく見て下さい。付いてないですよ」

「え？」

ヒナギクは恐る恐る振り返り、ハヤテを観察した。

髪は背中まで伸びており、胸が自分より膨らんでいて、股間にぶら下がっている筈の物が無くなっている。

「は、ハヤテくんよね？」

ヒナギクは首を傾げ訊ねた。

「でなきや誰ですか？ 今この家には僕、綾崎 颯とヒナギクさんしか居ないじゃないですか」

「そうよね。まあそれはそれとして、どうして女の子に？」

「知りませんよ、そんな事。て言うか参ったな。これじゃあ屋敷に戻れないです」

「戻らなくて良いんじゃない？」

「え？」

「元に戻るまで此処で暮らすのよ。そうしましょう？」

「否、それは遠慮します」

「どうしてよ！？」

「男としてですね」

「どう言う意味？」

「えーとつまり、ヒナギクさんの様な美しい女性が居るとあんな事やこんな事をしてしまうかも知れないからです」

その言葉を聞いて恥ずかしい図を妄想したヒナギクは顔を真っ赤に染めた。

「で、出てつてくれる？」

バスタオルはそれ使つて ヒナギクはそう付け加えて去つていった。

ハヤテは浴室を出ると、バスタオルで体を拭いて執事服を着た。

「うっ！」

胸に痛みを覚えたハヤテは、ヒナギクの部屋に移動した。

「あのー、ヒナギクさん」

「何よ、未だ居たの？」

とヒナギクが細い目で見詰める。

「すみません。用が済んだら出て行きます」

「用？」

「ブラジャーお持ちですか？何か胸が痛くて」

ヒナギクは頬赤らめ、咄嗟にタンスの前に移動し、ブラジャーを取り出してハヤテに渡した。

「こ、これお姉ちゃんから貰ったんだけど、使わないから貸してあげるわ。痛いんですよ？」

「有り難う御座います」

ハヤテはそう言つて上半身を脱いで裸にした。

「あの、着け方教えて下さい」

「あ、あなたね！ 女装が趣味の癖に着け方知らないの！？」

「そんな趣味無いですよ！」

「ヒナ祭り祭りの時に女装してハーマイオニーと名乗ってたのは何処の誰だったかしら？」

「あれは人形師ぜべつどの呪いです！」

「ふうん。まあ良いわ。そう言う事にしといてあげる」

「ヒナギクさんの中の僕のイメージって何なんですか？」

「女装が趣味でしかも泉の執事くんと出来てる変態執事くん」

「出来てないですよ！」

ハヤテがそう言つと、ヒナギクは「予想通りの反応ね」と笑った。

「ヒナギクさん、僕の事虐めて楽しいですか？」

「うん、楽しい」

「……………」

ハヤテは言葉を失った。

「あ」

ヒナギクは何かを思い出した様に声を漏らして「ブラジャー着けるんだったわよね？」と言つてハヤテにブラジャーを着けた。

「有り難う御座います」

ハヤテはそう言つて服を着て桂家を跡にした。

行く当ての無かつたハヤテは、前に住んでいたアパートにやって来た。

解錠し、ドアを開け、中に入る。

「はあ」

蛻の殻である部屋を見て溜め息を吐くハヤテ。

（なんて、居る訳無いよなあ）

ハヤテは靴を脱いで奥へ行き、横になった。

そして目を瞑り、夢の世界へ旅立つ。

「マイオニー、起きてハーマイオニー」

その声に、ハヤテは薄目を開けた。

すると目の前に、体が変化する前の自分の顔が現れた。

「え、ええ!？」

ハヤテは驚き、起き上がり様に後方へ下がった。

「だ、誰ですかあなた!？」

「嫌だなあ。兄のハヤテだよ」

「な、何言ってるんですか!？ ハヤテは僕ですよ!」

「は？」

目の前の自分は目を丸くした。

「だから、僕がハヤテなんですってば!」

その言葉に目の前の自分は細い目で見る。

「君は妹のハーマイオニー。大丈夫？」

（は、ハーマイオニーだって？ と言う事なんだ……）

「そんな事より、早く行かないと遅れるよ？」

そう言っ腕時計を示すもう一人の自分。

ハヤテは時刻を確認した。

現在、午前8時30分。

「うわあつ、遅刻だー!」

ハヤテは立ち上がり様に叫ぶと、慌てて玄関に移動した。

「一寸待つて」ともう一人の自分。

「何ですか？」

ハヤテが振り向くと、白皇の女子用制服を持ったもう一人の自分が立っていた。

「ハーマイオニー、これに着替えないと」

ハヤテはそれを奪取して奥に行き「見ないで下さいよ?」と言って着替えを始めた。

執事服を脱ぎ、白皇の女子制服を着るハヤテ。

「行つてきます！」

着替え終えたハヤテはそう言つて家を飛び出して白皇に向かった。その途中、屋敷に寄り、自室にある鞆を取り、屋敷を出て再び白皇を目指す。

白皇に辿り着くと、ハヤテはヒナギクに逢った。

「おはよう御座います、ヒナギクさん」

ヒナギクは「おはよう、ハヤテくん」と言つて笑みを浮かべた。すると、もう一人のハヤテが現れた。

「ヒナギクさん、僕はこっちですよ？」

その声にヒナギクは振り向き、感嘆の声を上げた。

「何でハヤテくんが二人居るのよ！？」

「あ、それは」

ハヤテはヒナギクに近付き耳元で囁く。

「（実はですね、今朝起きたら、前に住んでたアパートに変化後と変化前の僕が居たんです。何でこうなったのかは理解出来ません）」

「（ドッペルゲンガーかしら？）」

「（僕死にますよ！？）」

「（良いんじゃない？）」

「（あなたは僕に死んで欲しいんですか！？）」

「（冗談、真に受けないで頂戴。所で、あのハヤテくんはあなたの事何て呼んでるの？）」

「（ハーマイオニー。妹だそうです）」

「（じゃあ三人の時はそう呼ぶわ）」

相談を終えると、二人はもう一人のハヤテの方を向いた。もう一人のハヤテは疑問符を浮かべて首を傾げていた。

「えっと……おはよう、ハヤテくん」

ヒナギクは作り笑顔で挨拶した。

するとハヤテも笑顔で「おはよう御座います、ヒナギクさん」と挨拶を返した。

「あ」

ハヤテは何かを思い出し、再びヒナギクの耳元で言う。

「（ヒナギクさん、どうしましょう？）」「

「（何を？）」「

「（僕の学籍ですよ。ハーマイオニーなんて学籍簿に登録されてませんよ？）」「

「（だったら登録すれば良いんじゃないかしら？）」「

「（どうやって？）」「

「（私に任せて）」「

ヒナギクは胸を張ってそう言うと、校舎の方へ駆けていった。

（何をする気だ、ヒナギクさん？）

そう思ってハヤテは後を追う。

ヒナギクの後を追いついてきたハヤテは、理事長室の前に辿り着いた。

中では葛葉くすは キリカが居ないのを理由に、ヒナギクが机や引き出し、棚を漁っていた。

（あつたわ）

学籍簿を見付けると、ヒナギクはそれを開いてハーマイオニーの名を2年生のリストに書き加えた。

「誰！？」

何者かの気配に気付いたヒナギクはそう言ってドアに駆け開放した。

「うわっ！」

とハヤテが倒れた。

「ハヤテくん、何してるのよ？」

「すみません。何をするのか気になって」

「内緒よ？」

「解ってますよ」

ハヤテはそう言いながら立ち上がり「で、何組にしたんですか？」と訊ねた。

「私と同じクラスにしたいわ。じゃ」

ヒナギクはそう言っで去ろうとした。

「あの、どちらへ？」

「職員室」

「だったら僕も行きますよ」

「良いわよ、来なくて」

「え？」

「あなたは教室に行つてなさい。お姉ちゃんとは私が話してくるから」

そう言い放ち、今度は本当に去つていくヒナギク。

一人残されたハヤテは、渋々教室に向かった。

第01話：分離（後書き）

作中の人形師ぜっどの件について、ヒナとハヤテが会話した事には突っ込まないで下さい。ヒナが誰かから聞いて知ったって事にし
として下さい。修正するのも面倒だから

第02話：サボリの訳（前書き）

誰だつて授業サボるのには訳があるのよな第2話。

「それは生徒会長としてどうかと・・・。by・ハーマイオニー」

第02話：サボリの訳

教室に着くと、ハヤテことハーマイオニーは空席を見付けてそこに座った。

辺りを見回すと、殆んどの人たちがハーマイオニーを見ている。耳を澄ますと色んな会話が聞こえてきた。

「あいつって7組の綾崎だよな？」

「クラス替えたのか？」

「っ！かあれ、絶対女装してるよな」

ハーマイオニーは耳を押さえて周囲の音が聞こえないようにした。すると何者かに肩を叩かれた。

振り向くとヒナギクが疑問視していた。

ハーマイオニーは耳から手を放して訊ねた。

「何か用ですか？」

「否、別に用って訳じゃないんだけど、どうして耳を塞いでるのか気になって」

「一寸回りが五月蠅くて。て言うかこの格好凄く目立ってる気がするんですが？」

ヒナギクは辺りを見回しつつ「確かに」と答えた。

「所で、この席で良かったでしょうか？」

「良くないわよ。あなたの席は隣」

言ってヒナギクはハヤテの左側の席を指差した。

「え、じゃあ此処は誰の席なんでしょう？」

「私の席だけど……別に良いわ。今日は私が隣に座る」

そう言ってハヤテの隣に座った直後、実の姉である担任の桂^{かつ}雪路^らが教室に入ってきた。

「綾崎 ハーマイオニー居る？」と雪路が室内を見渡す。

「お姉ちゃん」

ヒナギクが呼んで隣を示した。

「ああ、その娘が。こつち来てくれる？」

ハーマイオニーは立ち上がると教卓の前に移動した。

「それじゃあHR始めるよー。けどその前に転校生紹介するわ」

雪路はそう言ってハーマイオニーを示した。

「転校生の綾崎 ハーマイオニー。この娘は7組のハヤテくんの双子の妹よ」

「え、そうなの？」

「道理で似てる訳だ」
と生徒たち。

「綾崎 ハーマイオニーです。よろしくお願いします」
言って頭を下げるハーマイオニー。

「はい、そんじゃあHR始めるから席着いて」

雪路にそう促されたハーマイオニーは席へと戻った。

「出席取るわよー」

そう言って出席を取り始める雪路……は置いといて、ヒナギクが立ち上がった。

「あれ、何処行くんですか？ HR終わったら直ぐ授業ですよ」

ハーマイオニーがそう訊ねるとヒナギクは「フケる」と答えて教室を出て行こうとした。

「一寸ヒナ、何処行こうつての？」

雪路が出欠確認を中断して訊ねる。

「何処だつて良いでしょ？」

「良くないわよ。今HR中よ。席に着きなさい」

「拒否するわ」

ヒナギクはそう言い放って廊下に出た。

「ヒナギクさん、待って下さい」とハーマイオニーが教室から出て来る。

「何？」

振り向くヒナギク。

「教室に戻りましょう、ヒナギクさん」

「拒否するわ」

「どうしてですか？」

「どうしても。理由なんて無いわ」

「……何か遭ったんですか？」

「否、別に……。それじゃあ」

ヒナギクはそう言っただけで校舎外に向かって歩き出した。

「一寸待って下さい。僕を一人にする気ですか？」

「一緒に居たいの？」

ヒナギクは立ち止まって振り向いた。

「いえ、取り立てては」

「じゃあ付いて来ないで。良いわね？」

「そうはいきません。我が校の生徒会長たる者が授業をサボるうなんて、僕は許しませんよ」

「あら、言ってくれるじゃない。だったら私を捕まえてみるのね」

ヒナギクはそう言うのと脱兎の如く逃げ出した。

「望む所です！」と後を追うハーマイオニー。だがしかし、一階に下りた所で見失ってしまう。

（何処行っただ、ヒナギクさんは？）

キョロキョロと見回しながら一階の廊下を進むハーマイオニー。

一方、ハーマイオニーを撒いたヒナギクは生徒会室に来ていた。

「さてと」

ヒナギクは会長の席に座り机の引き出しからぶよぶよがセットされたPSPを取り出して電源を入れた。

ゲームが起動し、音楽が流れ、Push start buttonと表示される。

ヒナギクは指示通りボタンを押してゲームをスタートした。

するとハーマイオニーが現れて「こんなの所で何してんですか！？」と叫ぶ様に訊ねた。

「うわあ、ハヤテくん！？」

ヒナギクは驚き慌て、目にも留まらぬ早さでPSPの電源を切っ

て引き出しに隠した。

「今何か隠しませんでしたか？」

「何も隠してないわよ」

「そうですか。では確認しますね」

ハーマイオニーがそう言っで引き出しを開けようとすると、ヒナギクが突き飛ばして阻止した。

「うわっ」

ハーマイオニーは後方に倒れテーブルの角に頭をぶつけた。

「いたっ！何するんですか！？」

「ごめん、つい・・・」

「ごめんじゃないですよ！で、何隠してるんですか！？」と睨むハーマイオニー。

「何も隠してないわよ」

「じゃあ見せて下さい」

「それは嫌」

「何ですか？」

「ぶよぶよがセットされたPSPが入ってるなんて絶対言わないんだからね」

ハーマイオニーは細い目でヒナギクを見詰めた。

「白皇学院高等部の生徒会長は授業サボってそんな事してるんですか？」

「う、五月蠅い！ナギに負けたから授業サボって練習してるのよ！何か文句ある！？」

「そうなんですか。いつからです？」

「半月くらい前からかしら。ハヤテくん、風邪で寝込んだじゃない？その時にお見舞いに言ったらナギに遊び相手をさせられてね。

それで負けて」

「成る程。でも授業サボってまでやる事でしょうか？」

「仕方ないでしょ！？それでもしなきゃ勝てないんだから！」

「勝算はあるんですか？」

「勝算？ それは……無い」

「駄目じゃないですか」

「そう言うあなたは勝てるの？」

「勝てますよ？ 僕はゲームではお嬢様に負けた事は一度たりとも御座いません」

「じゃ、じゃあ貴方に勝てばナギに勝てるのかしら？」

その言葉にハーマイオニーは思った。

（僕と真剣勝負して互角なのにお嬢様に勝てないのは何故だろう？）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8527d/>

ハヤテ&ハーマイオニー

2010年10月9日19時20分発行